イスラエル/パレスチナ紛争と欧米社会のレイシズム - <10月7日>以降のフランスの変化を中心に

鵜飼 哲 (元一橋大学教員)

2024年2月12日@安保保障関連法に反対する学者の会

0) 政界、メディアの反応

フランス大統領マクロン、対「イスラーム国」の国際的対応を念頭に、ハマース掃討を目的と した多国籍軍事行動を提唱(10月24日、イスラエルで、ネタニヤフ首相との会談時に)。

類比 (analogie) の大混乱・・・アメリカ<9・11>、フランス「シャルリ・エブド」etc

政治的類比 ⇔ 歴史的類比

数日後、発言撤回。

① <アラブ/パレスチナ=ナチス>、<イスラエル=ナチス>という等式は、双方から、イスラエル建国以来ずっと行われてきた政治的類比。その果てに、ヒトラーにユダヤ人絶滅を提案したのはアラブ人、エルサレムの大ムフティ、アミーン・アル・フサイニーだとい. う珍説まで登場・流布されている倒錯的現状(ネタニヤフ、世界シオニスト大会、2015)

■② イスラエルの占領政策とアパルトへイト時代の南アフリカの類比は歴史的類比。 国際人権団体の多数が認定。南アフリカ政府によるイスラエルの国際司法裁判所提訴の背景はこの認識。ネルソン・マンデラをはじめ、反アパルトへイト運動の主軸を担ったアフリカ人民族会議(ANC)には黒人、ユダヤ人の弁護士多数が関与。

■ → 政治的類比と歴史的類比を峻別する 作業こそ学問研究の役割



左・ヤセル・アラファト (1929 - 2004)

右・ネルソン・マンデラ (1918 - 2013)



2014年7月19日、パリ、共和国広場

1)禁止されたパレスチナ連帯デモ

内務大臣ジェラール・ダルマナン、パレスチナ連帯デモに「反ユダヤ主義」挑発の恐れありとして禁止命令(10月12日)

⇔ パリの行政裁判所、「デモの自由」の侵害として禁止命令の無効判断(10月19日)。

フランスではパレスチナ連帯デモは2014年以来、行政命令による禁止/司法判断による許可(事後判断を含む)というパターンが定着。政府は人権規範の侵害であることを承知のうえで、政治的意図から禁止を乱発する構造

→ 「反ユダヤ主義」の政治利 (instrumentalisation)

2)禁止された講演会「反ユダヤ主義およびその政治利用に反対しパレスチナにおける革命的平和を求めて」

2023年12月6日に予定されていた、「平和のためのフランス・ユダヤ人連合」「コレクティフ・ツェデク(義)」「パリ=郊外反ファシズム連合」「永続革命」「反資本主義新党」他主催によるアメリカ・ユダヤ人の哲学者ジュディス・バトラーの講演会が、会場(シルク・エレクトリック)の管轄団体であるパリ市の決定で中止される。

「講演に続いて公共秩序を乱す性質の論争が生じることは必至」との判断に基づくとされる(『リベラシオン』、12月4日)。



ジュディス・バトラー(1956 -)

アメリカ・ユダヤ人のバイデン大統領宛書簡 - わたしたちは即時停戦を求めます(2023日10月19日)

わたしたちはユダヤ系アメリカ人の作家、アーティスト、研究者です。ユダヤ人であるということの意味は、わたしたちそれぞれにとって異なります。しかし、少なくとも一人のユダヤ人の親族がいます。このことは、わたしたちがイスラエルに移住し、イスラエルの市民権を得る権利があることを意味します。

わたしたちはイスラエルとパレスチナの民間人に対する襲撃を断罪します。ハマースの行動を断罪することと、パレスチナ人に対する歴史的な、そして現在進行中の抑圧を認めることは、可能であり、実際に必要なことであると信じます。ハマースの襲撃を断罪することと、わたしたちが書いているあいだにも展開され加速化しつつある、ガザ住民に対する集団懲罰に反対する立場を取ることは、可能であり必要なことであると信じます。

200万人以上の人々の生活必需品の供給を断ち、パレスチナ人の家族たちに北部の自宅から逃げ出すよう要求し、行き場を失った人々を無差別に爆撃する。これは戦争犯罪であり弁護の余地のない行為です。にもかかわらずアメリカ合州国の政府は、無実のガザ住民を人間とみなさず殺戮することに、「道義的」かつ物質的な支持を差し出しています。わたしたちは、イスラエル政府がアメリカの支援を得て行っていることに公式に反対を表明します。わたしたちはアメリカ政府に、即時停戦の道を探り、わたしたちが持つ手立てを、人質が無事帰還するための支援に振り向け、平和に向けた外交的な道を建設するために用いることを求めます。

ユダヤ人として、アメリカ人として、わたしたちは、イスラエルに対するアメリカの明白な支持によってではなく、わたしたちの圧倒的多数が当然のことと考える人権の普遍性を、わたしたちの政府が強調し続けることによってこそ、わたしたちのコミュニティのかなで、そして世界のなかで、自分が安全であると感じられるようになるでしょう。

ジュディス・バトラー、マーシャ・ゲッセン、レイチェル・クシュナー、ベン・ラーナー、V(旧名イヴ・エンスラー) ほか(43名)





ニューヨーク、日付不詳

パリ、2023年12月2日

3) 研究者、学生に対する未曾有の圧力

米国ハーヴァード大学学長クローディン・ゲイ、辞任(2024年1月2日)

マッカーシズムの再来とも言われる同種の傾向はフランスでも顕著に。研究者にはメディアで発言を控えるよう、学生には論文のテーマを変えるよう、大学ないし研究機関から公然、隠然の圧力が加えられる状況。「発言の自由」「学問の自由」の明白な侵害。

「意味を与えようとするやいなやもう許容されません。手のつけられないこの無知が、ファシズム的傾向の立場と並んではびこる雰囲気のなかでは、感情が説明の鍵になります。」

「パレスチナについて語ったとたん(・・・)、わたしたちがちょっとでも偏向したことを言おうものなら、待ち構えていたように袋叩きに合います。いまの空気は前例がありません。」

「自決権、植民地史に関する言説を発することはすべて、今日文字通り不可能になりました。そしてこうした言説を検閲するために、反ユダヤ主義のような、このうえなく深刻な非難が持ち出されます。しかし、中立公正とは、イスラエル極右政権の側に立つ支配的な言説に、人文・社会科学を落とし込むことではないはずです。」

(記事中に引用された匿名の研究者たちの発言。「もはや学者ではなくイデオローグとみなされる」、『ユマニテ』、2023年12月5日)



クローディン・ゲイ (1970 -)

4)政治地図の大変動

反イスラームと親イスラエルという二つの傾向を共有することで主流派政治勢力と極右勢力の距離が縮小。親パレスチナの左派を「反ユダヤ主義」として排除する力学が定着しつつある。

→ 中道と左派の連合による「反ファシズム統一戦線」はもはや不可能? 危機の深さは20世紀の30年代以上?

「イスラエル支持という大事の前に、(極右による)ムスリムーアラブ人差別は彼らの考慮から除外されるのである。こうした態度をとらせる理屈は、イスラエルにオーストリア・オランダ・ハンガリーといった欧州各国の極右と手を握らせているものと、根本的には同じものだ。反イスラムの欧州ーイスラエル共同戦線を形成するために、アラブ諸国の反セム主義は大々的に糾弾しつつ、欧州由来の反セム主義にはそっと目を閉じようというわけである。こうして極右にとってイスラエル支持という選択は、自己の反セム主義を抹消しつつイスラムーアラブ人と「極左」を攻撃するための絶好の機会になっている。」(須納瀬淳「脱歴史化の政治ーイスラエル、フランス、パレスチナ」、『現代思想』2024年2月)



反ユダヤ主義反対デモ パリ、2023年11月13日

ミシェル・ヴィヴィヨルカ (1946 -)

5) 欧米の反レイシズム運動の課題

植民地主義に起源を持つレイシズム反対運動と反ユダヤ主義反対運動の 再結合

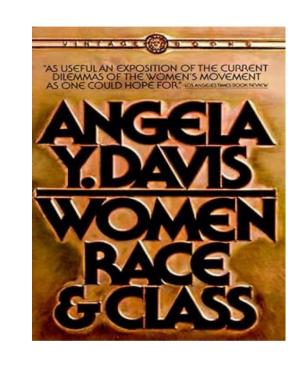
「ユダヤ人憎悪には独特の歴史的厚みがあり古代まで遡るとする研究者もいます。したがって、科学を標榜し19世紀に起源があるレイシズムと同じレベルに置くことはできません。歴史的観点からは二つの現象は区別したほうがいいでしょう。しかし、その同時代性において双方を分析する場合には、必要となるカテゴリーや使える理論はまったく異な、隔離、差別、暴力、偏見、ステレオタイプなど、あらゆる形態におけるるわけではありません。社会学的展望では、反ユダヤ主義とレイシズムは他者の排斥という同じ家族に属します。(・・・)この点で、アメリカの黒人とユダヤ人の歴史は大変興味深いものです。1950年代終わりには民主主義者のユダヤ人は公民権運動に加わりましたがその後分岐が生じました。(・・・)近年、ユダヤ人がブラック・ライヴズ・マター(BLM)の運動を支持したことで、二つの世界の接近が芽生えています。」(ミシェル・ヴィヴィヨルカ「レイシズム反対闘争と反ユダヤ主義反対闘争は連繫しなければならないのか?(2/2)」、『ユマニテ』、2023年12月5日)

6) 二つの闘いの結合の<象徴>としてのアンジェラ・デイヴィス

1970年代初め、カリフォルニア大学バークレー校の哲学教員だったデイ ヴィスは、黒人解放運動の左派組織「ブラック・パンサー党」の党員 ジョージ・ジャクソンの救援活動に関与して逮捕、死刑の危険にさらさ れる。世界的な釈放要求運動の末に自由を回復、後年ブラック・フェミ ニズムの理論家に。『女たち、人種、階級』(1983)の著者として合州 国、ヨーロッパ、グローバルサウスの、非白人系女性解放運動の支柱的 存在。

2019年、出身地のバーミングハムで人権賞受賞予定も、イスラエル・ボ イコット運動(BDS)への関与を理由に取りやめに。2023年、フランスの サンドニ市のリセの教員団が学校を「アンジェラ・デイヴィス校」と命 名することを決定するも、イル=ド=フランス県知事のヴァレリ・ペク レスは不承認。1955年、公共バスの人種隔離を拒否して公民権運動の発 端を画した黒人女性の名から「ローザ・パークス校」と命名することで 決着。

「平和のためのユダヤ(人)の声」(Jewish Voice for Peace)を支持 『女たち、人種、階級』(1983) するデイヴィスは、中止されたバトラー講演にオンラインで参加する予 定だった。



アンジェラ・Y・デイヴィス



アンジェラ・デイヴィス (1944 -)

「この紛争がどう決着するかはわたしたちが何をするかにかかっています。平和を求める行動を続けていかなくてはなりません。 南アフリカの反アパルトヘイト運動にとっても国際ボイコット運動は大きな役割を果たしました。停戦を求めガザ住民の虐殺に反対する運動には多くのユダヤ人が参加しています。わたしたちが求めているのはレイシズムも反ユダヤ主義もない平和な世界です。」

(アンジェラ・デイヴィス「わたしはパレスチナ人の闘いととても深いつながりを感じています」(フランス・アンテールのインタビュー、2023年11月20日)

https://www.radiofrance.fr/franceinter/podcasts/l-invite-de-7h50/l-invite-de-7h50-du-lundi-20-novembre-2023-4241123)